

## 翻 訳

# ヨーロッパ諸国のハロウィン (2)

ゴットフリート・コルフ (編)

河 野 眞 (訳)

### [解題]

前号に続いて、ドイツ民俗学会の機関誌が2001年に特集したヨーロッパ諸国のハロウィンに関するヨーロッパ諸国からの研究報告を訳出する。今回は、イタリア、スペイン、ノルウェーの3国からの報告である。前号には、企画者であるゴットフリート・コルフ教授による呼びかけと指針の論考に併せて、アイルランドとフランスからの寄稿を取り上げた。原文の順序から言えば、今回の最初にフランスからの寄稿がさらに一篇加わるはずであるが、先ずできるだけ多くの国々の状況を見渡し得ることを優先させて、次回に繰り延べた。したがって、今回の内容を目次として挙げると、次のようになる。

ファビオ・ムニャイーニ (シエナ/イタリア) ハロイタリー — 死者信奉から死のカーニヴァル化へ

Fabio Mugnaini (Siena), *Hallowitaly – Vom Kult der Toten zur Karnevalisierung des Todes*

ホセフィーナ・ローマ (バルセロナ/スペイン) ハロウィンの再発見

Josefina Roma (Barcelona), *Halloween – wiedergefunden*

アーネ・オールヴィック (オスロ/ノルウェー) ノルウェーのハロウィン

Ane Ohrvik (Oslo), *Halloween in Norway*

訳出にあたっては、体裁の上で多少の工夫をほどこした。元の論文・報告の形態が完全には統一されていない、そのままでは読み辛くなる恐れがあったからである。特に本文中に注記を組み込んでいる場合がそうである。テーマの性格上、時事的な資料が多用され、特に新聞記事については本文を追いながら日付が確認できるのは欧文の原文では便宜であるが、翻訳となると和文と欧文とが複雑に入り組むことになる。そこで原文の括弧書きを脚注の形式に直し、本文中の欧語は地名と若干の人名に限った。また、馴染みの薄い事項などで情報を補強する必要がある場合には、訳注をほどこして各稿の末尾に置いた。

## ハロイタリー — 死者信奉から死のカーニヴァル化へ

ファビオ・ムニャイーニ (シエナ)

[原タイトル] Fabio Mugnaini (Siena), *Hallowitaly – Vom Kult der Toten zur Karnevalisierung des Todes*

### 1.1. ハロウィンの今日

イタリアのトスカナ地方に生まれ育った私の記憶のするところ、ハロウィンとの最初の触れ合いは1991年であった。その時、私的なハロウィンの催しに招待されたのである。私の隣人の一人に25歳の女子学生がいて、北イタリアの裕福な家の出であった。その両親の別荘でパーティーが開かれたのである。別荘は昔の農家をちょうどその頃瀟洒なセカンドハウスに改造したもので、そこに大勢の若者たちがあつまって、ダンスをしたり、煙草をふかしたり、お喋りをして過ごしたのだった。もともと、ハロウィンというテーマに合った仮装をしている者は極くわずかだった。ほとんどはカジュアルな服装で、精々、仮面風の化粧か、ちょっとしたアクセサリーをつけている程度だった。吸血鬼の歯、<sup>ヴァンパイア</sup>魔女の頭巾、紫の薄物のケープ<sup>i</sup> などである。ダンスホールの床はディスコテークのように暗くされ、家の他の部分はライトアップを受けていた。バルコニーの肘突きと窓辺にはジャック・オ・ランタン・スタイルのパンプキン<sup>ii</sup> が並んでいた。その頃、ハロウィンは、パーティーの口実のようなところがあり、昔からの親しい付き合いを維持したり、新たな人間関係を作る機会だったのである。その点で、ハロウィンは、コスモポリタンの姿勢に傾く若者たちにとっては<アウトサイダーではない>とのシグナルを意味していたが、またそれ以上でもなかった。しかしその後、徐々にポスターや手書きの広告が目につくようになった。そして今では、毎年10月の末日には街頭で配られたり、スナックに貼り出されたり、ディスコで人目を惹いたりするまでになっている。

私が次にハロウィンと出遭ったのは、2年前のクリスマスにティム・バートンの有名なテレビ・アニメ「ナイトメア・ビフォア・クリスマス」(クリスマスへの悪夢)<sup>iii</sup> が放映されたときだった。私の息子とその友達は5歳前後だったが、このアニメに夢中になった。ジャック・スケルトン<sup>iv</sup> は子供たちの空想世界の英雄であり、お絵かきの一番の人気キャラクターになったものである。ディズニー・コミックスを始めとするアングロサクソン系の娯楽企業が生み出したトリック・キャラクターが子供たちを夢中にさせているなど、ハロウィンは専ら<かわいいお遊び> (dolcetto-o-sherzetto) となっている。

今日、たいていの子供たちは、それらが死者への追憶とされる行事であることを知らない。11月2日のカトリック教会の万霊節はもはや忘れられている。その日は通常の登校日であり、墓参りが今も生きつづけている場合でも子供は連れて行かない。しかし11月始めの時期にある種の意味があることは、メディアを通じて感覚的に知っている。10月末が近づくと、私の息子とその友達、盛大なお祝いを開いてほしいとせがむが、その時思い描かれているのは、カーニバルのようなものである。つまり、町も村も街路もダンスホールもディスコも仮面をつけた様々なグループで一杯になるお祭り騒ぎである。もっとも、子供たちが残念がっているように、これまでシエナ市当局には、ハロウィンに合わせて公的な催しを開こうとする意識はみられない。

## 1.2. 昔の行事の様子：クローズアップ・トスカナ

私は、トスカナ地方の農家の出身で、大人になるまでこの地方で過ごし、また今は私の息子もこの地で育っている。この連続性のほかには、私と息子の育ち方のなかで、死をめぐる祭り行事などでは特に共通性をもつものはない。既に私の世代は、死を突き放して見るようになっていたが、経験を通して、死の意味するところを知ってもいるのが普通だった。死を理解しないながらも、死者を送る夜伽の場には立ち会っていた。カトリック教会の儀式の他にも、大人たちの恐ろしい囁を基にして死は知ったものとなっていた。やがて怪奇小説の類を読んだり、ホラー映画を見たりするようになったが、死のテーマへのそうした接近は、私たちの生活の現実とは直接には関係しない遠い世界に由来するように思われた。想起させば、私の母は、10月の最後の一週には、夕食の後、跪いてロザリオの祈禱を唱えていた。私の家庭は特に宗教的というわけではなかったが、その時期には突然死者への追憶の空気の中に入ったのである。

その時期には、最近亡くなった親戚だけでなく、名前も知らない遠い祖先の写真の前に蠟燭が灯された。それらの故人に対して祈りが向けられるのである。墓地の墓碑はきちんと掃除され、修理がなされ、飾り付けが行なわれた。沢山の花卉、特に菊の花が、あらかじめ温めておかれた厩舎に用意された。そして一年の最も重要な節目の一つである11月1日の万霊節がやってくる。その日には、誰もが着飾り、親戚の人たちが遠方からもやってくる。日没の少し前に全員が集まり、教会堂から墓地まで行列を組んで歩む。墓地の地面には花々が隙間無く撒かれている。墓碑には、大理石作りであると簡素な古い碑石であると問わず、物故者の人生歴が伝えられている。私は毎度大きなランプを持って歩かされたが、そこで見たのは、参会者たちが万霊を称える歌をうたい、自分たちの故人を偲ぶ様子だった。それを見て、集まっている誰もが、自分たちの逝いた縁者を個人的な聖者とみ

なしていることがよく分かった。

万聖節は大きな祭りで、前夜には誰もが存分に飲食にふける。墓地に参るのは翌日で、打って変わって厳粛な雰囲気の中かで墓参がおこなわれる。それは、まさしく死者の日である。教会堂では、祭壇の前に黒と金の彩りの絨毯が敷かれ、その四隅には大きな蠟燭が立っている。普段と異なるのは、そこで歌われる聖歌だけではない。墓地へのお参りでは、普段着の人はめったにいない。セレモニー自体があっさりしているだけに、却って追憶の密度は高まるのであった。しかし翌日には、死者の写真は寝室からすっかり消えてしまう。写真は、重い箆笥の引出しの奥にしまわれるのである。そうした状況では、仮面をつけたり、おふぎけに興じたり、怪奇な様相を作りだしたりすることなど、誰も思いつかなかった。骸骨や人<sup>ヴェアヴォルフ</sup>狼（おおかみ人間）<sup>▽</sup>や吸血鬼が街路をうろつくなどといったことは、起きようがなかったのである。

今日のハロウィン・パレードに当たるものも存在しなかった。あるいは、厳密に言うなら、すべてが既に揃っていてもいた。ただそれらのモチーフや形象は、他のシンボリックな秩序に属していたのである。狼人間は、死者の傍らでの通夜で語られる話のなかに姿をみせていた。不気味な墓地も口承文芸において知られたものだった。死への恐れも、特に人が突然あるいは苦しみつつ死んだ場所などにまつわっていた。恐い囁も数多く行なわれ、民俗研究者によって収集されてきた。しかし、それらは、11月の第一日目とは結びついていなかった。ジャック・オ・ランタン風のパンプキンですら、地方の伝統のなかにみとめられた。カボチャは夏の終わりに収穫され、豚の飼料として蓄えられた。そのうちの数個を割り貫いて、中に蠟燭を灯して窓辺や階段の踊り場におくことがあった。それらは“morte secca”，すなわち〈髑髏〉と呼ばれたりもしたが、だからといって死者儀礼とはつながりを持ってはいなかった。見つけごっこも、トスカナだけでなくイタリア諸地方で季節の遊びとして行なわれる鬼ごっこ（その名残は菓子類だが）になかに姿をみせていた。因みに、トスカナにおけるその種の習俗については、ピエトロ・クレメンテが詳細な調査をした。それによれば、5月1日、四旬節の終わり、あるいは三聖王の日の遊びであった<sup>1</sup>。この見つけものの行事の意味は、社会的交換の芸人的な演出にある。それらは、ローカルな帰属性の感情を生むことに役立っていた。しかし、自然と再生をめぐる哲学や時代精神が好む祝祭性とは何の関係ももっていなかった。

ハロウィンのテーマに属する個々の要素、すなわちフランケンシュタインからこの世ならぬ存在を経て吸血鬼や魔女や狼人間にいたる諸要素について、最近になってはじめてポピュラーになったのはどれであるか、逆に古くからポピュラー・カルチャーの仲間入りをしていたのはいずれであるかを調査するのは大事なことである。例えば、人狼譚は通夜で

<sup>1</sup> Pietro Clemente, 1978.

聞かされるものだったが、さりとて普通の人間にとってあからさまな恐怖というわけではなかった。むしろ狼人間は、人間が疼痛に苦しんで叫び声を挙げる様を映すものでもある。こうした種類のものとして狼人間にはしばしば名前が付いており、その点では魔女とも同巧であった。しかし狼人間と魔女の両方とも、11月始めの死者信奉ともその他の死者の表現とも無縁であった。恐怖の領域が容易に死と結びつくのに対して、死の意味は必ずしも恐怖に収斂するわけではない。

## 2.1. 死者信奉，そして死者の祭り

ハロウィンと、ローカルな伝統とのあいだにあきらかな並行関係が見られるとすれば、それは再訪者のモチーフであろう。どちらの場合にも、その時々の主唱者は、生と死を分ける僅かな差異をシンボル化している線を後ずさり気味に歩む。エルネスト・デ・マルティーノが南イタリアの調査において突きとめたように<sup>2</sup>、再訪者は、10月31日や11月1日とは関連をもたない。再訪者の要点は、いつなりとも呼び戻せるモチーフであることにみとめられ、それは取りも直さず人間の生命が失われる危険が常に存することを指し示している。また再訪者は無名的でもある。再訪者には、死への境界が把握し得ないことが投影されている。同時に、再訪者は、おぞましい消滅の原理に抗する文化的な構築としても機能している。家々で蠟燭を灯して迎えられ葡萄酒とパンでもてなされる死者たちは、無名の再訪者のグループには属さない。彼らは名前と顔をもち、また個々の人間と自分の家族につながっている。

死との出会いとは、上でふれたような儀式を通じて以外ではない。そうした儀式は、中心となっているカトリック教会の世界観が地域的にやや異なって受容されたものから構成されている。死は、決して集団でふぎける機会などではない。しかし、盛んになりつつあるハロウィンの伝統は、おふぎけを軸に組み立てられている。たしかに、同種の標識が用いられ季節的にも重なっているが、死者信奉と死の祭りは異なった二者である。一方はカトリック教会に原型をもつ古くからの伝統であり、もう一方の新たに形成されつつある死の祭りは世俗的な姿勢を見せ、ビジネスに主導されている面がある。両者はそれぞれ自律的な構造をもつ異なった複合体と見なければならぬ。

他の祭礼と同様、死者追憶にかかわるカトリック教会的な形態は、年中行事のサイクルから次第に姿を消しつつある。またそれは、文化・娯楽産業に支えられることを必要とはしてこなかった。それとは対照的に、ハロウィンの普及を促しているのは、アメリカの文化グッズの広まりである。その面では、ハロウィンは、カーニヴァルの先例を追っている。

<sup>2</sup> Ernesto de Martinoの文献は参考文献表を参照。

ハロウィンは、仮面と仮想上のアイデンティティ<sup>ごっこ</sup>の新しいチャンスを提供する。既存の伝説や習俗は、新たな形態が生育する上での地方ごとの腐植土となっているに過ぎない。古くからのエレメントは新たな儀式的構築に取り入れられはするが、元の機能と何らかの関係によってつながる必要性をもっていない。

## 2.2. 立脚点と解釈図式

最近出たばかりの論考『発明された伝統』において、ルチアーノ・モルビアート<sup>vi</sup>は、ハロウィンの普及にあたっては小学校の教員の役割が大きいことを強調している。それによれば、英語学習を始める上で遊戯的に覚えるためにハロウィンが活用されたと言うのである<sup>3</sup>。またジャン・ルイーゼ・ブラーヴォ<sup>vii</sup>は、最近の研究のなかで、ハロウィンをイタリアの年間の行事サイクルの一つとして描くと共に、批判的なコメントから痛烈な非難までを盛り込んだ<sup>4</sup>。その説くところでは、ありとあらゆるガラクタが登場する大人のための死の祭りが成立したのは学校においてであったとされる。その結果、ハロウィンは、11月1日前後の数夜、ディスコや妖怪パレードを引き連れてのさばるようになった、と言う。ブラーヴォによれば、ハロウィンとは、此界と異界の境界がくずれ、祖先が地上に立ち返る数夜の祭りである。ブラーヴォは、そこには伝統的な死者祭礼との連続性があるとする。それによると、ハロウィンを形作る諸要素には、地元の文化的伝承において知られていたものが少なからず含まれる。その事例として、ブラーヴォは、死者追憶の日に蠟燭を灯したパンプキンを持って歩くカラブリア地方の子供の行事を挙げている。

ジャン・ルイーゼ・ブラーヴォの解釈は、ハロウィンという新しい儀式的の最初から行なわれてきた、先に挙げた議論に寄与するところがある。ブラーヴォの観点は、ハロウィンをイタリア文化とはまったく異質な祭りとみる見解に反駁する方向をとっている。なお、ニュアンスの違いを別にすると、ルイーゼ・ロムバルディ・サトリアーニ<sup>viii</sup>も、同様の見方を示している。独自の研究を基礎に、サトリアーニも、昔からの行事と新しい現象との間に連続性を想定する。年間では数多くの祭りが開催されるが、それらにおいては、文化人類学者が、アクチュアルでポピュラーなものとなっている行事次第について、専門知識の裏づけをもとめられることが少なくない。ハロウィンの場合も、そうした役立て方への関心があり、サトリアーニはそれに応えるものとなっている。彼は、ハロウィンが既に重要な祭りとなっていること、それは何十というインターネットのサイトが示している通り

<sup>3</sup> Luciano Morbiato 2001, p. 155–156.

<sup>4</sup> Gian Luigi Bravo 2001, p. 180–183

であると受けとめる。彼はまた、メディアの多くがこの新しい儀式に反対して起こしている十字軍に与しようとはしない。関連商品として文化的には価値のない品物が氾濫することには、彼も不愉快のようであるが、さりとてイタリアの文化的な統一性がおびやかされるといった心配をしてもいない。彼はむしろ民俗行事の無碍な移動性を強調し、その広まりは文化受容に豊かな幅をもたらすと考える。彼にとって重要だったのは、ハロウィンによってシンボリックに表現された機能と必要性を突きとめることであった。人間は死を脅威として信奉する代わりに、死とく生産的にくかかわるものであることをハロウィンは教えてくれる、と言うのである。生命の果かなさ、ふるさととの絆、子供の楽しみ、これらをつなぐ可能性をハロウィンは作り出す、と言う。しかもサトリアーニの目から見ると、それらはいずれもイタリアの伝統的な風土に存するものであった。例えば11月1日の夜に行なわれるカトリック教会の死者祭礼、伝承では物故者がもたらすとされる子供へのプレゼント、さらに死者とのく対話くとしての一連の習俗である<sup>5</sup>。

### 2.3. ハロウィンの中身

同じ定期誌に掲載されたの他の論考からは、別種の情報を得ることができる。その論考が扱うのは、全国で行なわれてきた関連した事象にかかわる、情熱的で時には歪んだものともなる準備行為である。ハロウィンは、喜捨を集めるためにも活用される。先週の木曜、ローマ駐在のアメリカ大使トーマス・フォルグリエッタは、多数のVIPと政治家を大使館に招待した。招待された人々は、く悪魔は魔女や動物の仮装でやってきたが、その仮装衣裳は「ポンペイ聖心協会」(Holy Heart Institute of Pompei)のために残しておかれたく<sup>6</sup>。同じくローマでは、く灯りのパンプキンのフェスティバルくのタイトルで、幼児イエス(Bambino Gesù)の小児病院のための募金が行なわれた。

ハロウィンをラベルに掲げたビジネスの広まりも、現実には、ラベルが示すもの以上に多彩ですらある。昨年10月末には、サヴォーナでハプニングが起きた。ホモセクシュアルの男女が、舞台上上がったのである。1999年にも、ローマ近郊のカルカッタ村のあるクラブはく洞穴パーティーくと称して、その種のゲストを250人も招待した。2000年のプログラムは「Mr. & Mrs. Halloween」の自由演技と銘打たれ、また子供たちがくtrick or treatく遊びに招待された。それに加えて、特別の飾り付けがなされた村でのショッピング情報も盛り込まれた。パレルモでは、ファッションと仮面のワークショップと共に特別の

<sup>5</sup> 参照, Unmodo nuvo, anzi antico di colloquaire con i defunti. In: Il Mattino, 30. Oktober 1999, p.9.)

<sup>6</sup> 次のInternet情報を参照, Il Mattino, 30. Oktober 1999.

子供祭りが行なわれるが、またロマーニャ (Romagna 中部イタリア) では全ての家庭が〈シャーマンたち〉 (Samanen sic!)<sup>ix</sup> の儀式に参加する。このケルトの儀式において、生命の真の価値が発見され、陰の面が解消されるとされとされた。そこでは、豚肉が供されるが、ケルトとの観念では、特にたらふく食べることによって不死が付与されるとされる、とも言う。同様のことがらは、ケルト的な脈絡は欠いているものの、コリナルド (Corinaldo, 南イタリア, アッヴェリーノ地方) やボルゴ・ア・モッツァーノ (Borgo a Mozzano, トスカナ地方) でもみとめられる。後者の場合には、墓地の門扉がハロウィンに訪れる人なら誰にも開かれている。つまり、ゾンビから非地上的な存在に至るまでのすべてに対してである。そのイベントは、壮麗なローマ橋の上の花火で彩られるが、それゆえ、橋は〈悪魔の橋〉とも呼ばれている。

ディスコや青年クラブでの催し物は数え切れないほどである。トリノの新聞「ラ・スタムパ」 (La Stampa) は女吸血鬼とハンサムなカリフォルニア・ボーイズ<sup>x</sup> とのエロチックなダンスを取り上げた<sup>7</sup>。その記事は、ハロウィンの背後にある母体を読者に示している点でも興味深い。例えば、ある匿名の専門家は、万聖節ならびに前キリスト教の暦とハロウィンとの関係に注意を促している。しかも、ディズニーのキャラクターに重要なヒントを見ている。その論説では、ハロウィンは、総じてカーニヴァルに近いものと解されている。くもつとも、日常生活の超自然的な局面がより強調されてはいる。またこの理由から、若者たちに大層好まれる。それは、内面の深いところで燻っている不安を他愛無い活動に転換する全きチャンスに他ならない〉。

本来の期日に間に合わなくても、ハロウィンを後追的に催すチャンスとして11月30日がある。これは聖アンドレアス<sup>xi</sup>の日で、その前夜には、サルディニア島の小都市セノーリー (Sennori) では、学童たちが街路に繰り出し、伝承された文言を大声で唱えながらクッキーやプレゼントをねだる。行事の組織にあたるのは、地元の学校教師たちである。教師たちが意図するのは、その地方の伝統 (この場合では聖アンドレアス信奉) の復興であるが、同時にハロウィンに特有の要素を活用している。この事実の一つの設問を投げかけるであろう。それは、他の場合にも立てることができようが、またここで解答を出せるものでもない。すなわち、地方の伝統がハロウィンに吸収されており、気ままなパーティーのための口実だけに使われているのかどうか、という問題である。文化的な実態としては、昔からの行事が生きつづけ、それが新聞紙上でハロウィンと取り混ぜられているだけなのであろうか。あるいは、ハロウィンという流行現象は、その地域の文化遺産をたしかなものにするために導入されたと見るべきであろうか。そこで次の問いが来る。一体、誰が何

<sup>7</sup> La Stampa, 31. Oktober 2000.



を活用しているのであろうか。

## 2.4. 伝統の変容：仲介者としてのメディア

イベントの個別事例を挙げたが、次に、連続性あるいは民俗行事を一般論の位相で検討しようと思う。同時に、エスノグラフィーの面からの個別研究をもやや詳しく参照しなければならない。死者信奉の伝統のあり方、またハロウィンの実際の形態は、一般に考えられているのと異なり、地方的な特色も含めて多様である。この観点はまた、文化的現象の実際の形態の生成や解釈においてメディアが果たす役割を視野に置くことにもなる。

本稿で、有力な文化人類学の見解を新聞のコラムやインターネットから引いたが、それは決して偶然ではない。すでにロムバルディ・サトリーニが指摘しているように、ハロウィンの本質的な特徴は、巨大なメディアの存在を前提にしているところにある。とりわけ、最新のメディア手段であるインターネットである。インターネットには、どんな種類の情報も集まっており、それが任意のコンビネーションを作っている。その結果、無関係な位置にあったものが、それまで知られていなかったような断片に砕かれ、さらに巨大なモザイクになってゆく。ハロウィンは、ヴィジュアルなメディアの領域で、種々の見解の俎上にのぼり、それに支えられている。政治的右派のインターネット・サイトには、特にその現象が顕著で、死の重みについての独特のレトリックに適ったものとなっている。それに対して、悪魔崇拝者<sup>サタニスト</sup>はハロウィンを、伝統的な宗教の意義に疑問を投げかける手立てとしている。また、学校の生徒たちは、これまた、諸々の分野を横断するような学習のテーマとしてハロウィンを活用している。これらは、ハロウィン論議が考えられるあらゆる方向に向い得ることを示している。インターネットは、一人一人の利用者に、独自の活用可能性を無限に提供する。インターネットによって、＜伝統の創出＞(invention of tradition)におけるメディアのアクティヴな役割は、これまでになく表面化している。メディアの報道が経験に取って代わっていることは、ルードルフ・シェンダが強調している<sup>8</sup>。伝統は、一つの場所から他の場所へ伝播することができる。その場合、映像や報道や解説はどこでも同じであっても、その具体的な社会的意味合いは異なったかたちで定着することがあり得る。意味は、映像とは違って、同じように仲介されるわけではない。すなわち、模倣されたり、あるいは読解されたりすることもできる、その際、解説や解釈を左右するものとしての知的な作業が決定的な意味をもつ<sup>9</sup>。ハロウィンは、決して孤立した事例で

<sup>8</sup> Rudolf Schenda 1994.

<sup>9</sup> Köstlin 1996.

はない。メディアは、フォークロア現象でも新しいものと古いものを取り混ぜながら、ポピュラーな伝統を人々に思いおこさせる。そうした動きは、クリスマスでも母の日でもヴァレンタイン・デーでも起きており、また万聖節やその第二形態であるハロウィンにもあてはまる。かくしてハロウィンをめぐって、解釈の分野はまさに戦場の様相を呈する。宗教と無宗教、文化人類学者と消費者、ローカルなアイデンティティの擁護者とグローバルリスト、これらが相克する場である。ハロウィンがイタリアに長く根付くかどうかを断定するのは難しい。しかし、いずれにせよ、そこには、行き過ぎと見えるほど多様な意味が付着している。

## 2.5. ハロウィンと政治

「コリエーレ・デラ・セーラ」紙のコラムニストとして知られるようになったエルネスト・ガリ・デッラ・ロッチャ<sup>xiii</sup> は、イタリアの文化遺産の喪失に対する抵抗が欠けていることを厳しく問いかけて、知的なものへの攻撃の口火を切った。その見解は、文化的な種々の現象を解説する上で、正統的な拠り所の一つを提供した。因みに、デ・マージという社会学者<sup>xiv</sup> は、ハロウィンの異常な増殖体がマーケティング戦略に起因するとのテーゼを立てた。ロムバルディ・サトリアーニも、早い時期の書き物のなかで、新奇なものの影響に警告を発し、それらが、文化的に意味をもつ死者祭儀の通俗化であるとして指弾した<sup>10</sup>。

そうした発言においてはハロウィンとイタリアのナショナルな文化との対立が前提となっているが、それはまた幾つかの集団が政治的に利用するところともなっている。例えば、北イタリアの分離主義者は、自分たちと自余のイタリアとの間に線引きを画策する。先に取り上げたロムバルディ・サトリアーニの批判は、反批判を刺激した。口火を切ったのは、北イタリアの過激な政党「北部同盟」(Lega Nord) のラジオ局で、以来、定期的に専門家を招いて、ハロウィンとケルトの伝統との繋がりを探る番組を組んでいる。その観点によると、ハロウィンはケルト文化の表現であり、その特質は、キリスト教会による吸収のためのあらゆる試みにも拘わらず今日まで生き長らえてきたと言う。分離主義を信奉する民俗学者や武力をも辞さない姿勢のインフォーマントは、突然、その理論の正当性を証明することに労苦も厭わず躍起になり始めた。その際、今日のハロウィンに見える種々の活動形態がパダーニア文化<sup>11</sup> にひそむケルト的伝統に起源を負うことを証明するた

<sup>10</sup> 参照, Il Giorno, 3. November 1998.

<sup>11</sup> “La Padania” とは、1995/96年に北部同盟 (Lega Nord) によって想定され活用されるようになった地域名で、河川名ポー川 (Po) と親近な形容詞 “padano” から作られた。これについては次を参照, Elisabeth Fix, Italiens Parteiensystem im Wandel, Frankfurt/M. 1999, p. 146 (同書への編集者の注記)。

めに、数多くのローカルな儀礼が材料として提示された。因みにパダーニア文化の本質は、他の地方とは異なるものであるとされるのである（パダーニアとは、北イタリアに樹立が願われる民族国家の領域に対する名称である）。過激な分離主義に立つある論説には、ロムバルディ・サトリアーニを念頭においた次のような意見表明がみられる。〈論者は一点において正しい。すなわち、ハロウィンはイタリアとは無縁であるとしていることである。しかし我々はそうではない〉<sup>12</sup>。

それ以来、証明材料なるものの収集は政治性を帯びて非常に活発になってきた。中心に位置する目標は、推定される文化的差異を支持することにある。死をめぐる伝説や古い伝統の証拠が集められ、評価され、またハロウィンとケルト語とのあり得べき親近性が発見された。一年以上前になるが、「ラ・スタムパ」紙上であるジャーナリストがハロウィンを〈誤った伝統〉であるとの思い切った批判を載せたが、それに対して「北部同盟」は反論した。〈ハロウィンはパダーニアの祭り〉あるいは〈ハロウィンは幸いにも今日までパダーニアの各地で生き残っている〉と言うのであった<sup>13</sup>。「北部同盟」の信奉者にとっては、ハロウィンは何よりも〈シャーマニズム〉の伝統に立っている。すなわち、豚肉の儀式的な飽食あるいは墓地での真夜中の宴である。ハロウィンのカボチャをめぐっても、地元民でいながら北部同盟を支持しない者に対する脅しめがいのウィットが語られる。〈来年は少し時間をかけてカボチャを削り貫いてもよい。同盟に投票しないパダーニア人は頭が空っぽなのだから、蠟燭を口に詰め込んでやってもよいほどだ〉<sup>14</sup>。因みに、ごく最近のことだが、5月1日の祭りをケルトの伝統に沿ってアレンジする提案がなされた。しかし、ハロウィンの場合とは異なり、これまでのところ、この日取りは、新たなイデオロギーが付与されることに対して抵抗力を発揮している。

## 2.6. ハロウィンをめぐる聖戦

政治的な境界設定には、また別の塹壕線も重なっている。このところパダーニアにおいてポピュラーとなっている文化理解は、その赴くところキリスト教的な教えに疑問を付すことになるが、他方キリスト教会は、それ自体には特に目くじらを立ててはいない。キリスト教会は、悪霊や地獄の魔物を崇めることには意を用いてきたが、死者信奉の解釈をめぐる議論にも参加してきた。ミラノのマルティーニ枢機卿<sup>xv</sup>は「コリエーレ・デラ・セー

<sup>12</sup> G. Oneto, In : La Padania, 15. November 1998.

<sup>13</sup> F. Grosso, In : La Padania, 2. November 1999.

<sup>14</sup> A. Vagi, In: La Padania, 2. November 1999.

ラ」紙上に一文を寄せ、そのなかでハロウィンが一層ポピュラーになることには警戒心を示した。その説くところによると、ハロウィンは「私たちの伝統の外のものである。私たちの豊かな、これからも持ち伝えられるべき伝統。死者信奉もそうした歴史の一齣であり、永遠への希望を輝く契機に他ならない」<sup>15</sup>。

ハロウィンをめぐる葛藤で重要なのは、北部の狭い地域と中欧主権国家との対立ではない。むしろ、重大なのは、むしろ世俗化の拡大であり、教会が全力を挙げて防ごうとしているのもそれである。そこでの相克の基本線は明らかである。北部同盟は、ハロウィンをケルト起源の祭りであると宣伝している。北部同盟の側からのフォークロアの政治的な組み込みは、前キリスト教の伝統の過大評価である。そこではイタリア北部に深く根付いているキリスト教信仰が軽視されている。それに対して、もう一方の側に立つのは、キリスト教会である。キリスト教会は、キリスト教的な死者信奉を擁護して、ハロウィンを非難する。教会は、教会の祭礼が政教分離の傾向を強めることへの不満を募らせてきたが、ハロウィンもその攻撃目標になったのである。教会は、無数の説教を通じて、善きキリスト者の義務を呼びかけ、死の意味に関するカトリック教会の教義を認識すべきことを説き、さらに死者を偲ぶ古くからの形態を尊ぶことを勧めてきた。ハロウィンに関する教会の発言の多くは、クリスマスをめぐって既に数十年前からなされてきたのと同じ趣旨にある。その限りでは、ハロウィンに対する教会の闘いは、長く続いてきた教会と世俗世界の対立の最新版と解することができる。もっとも、その間に、イタリアの政治情勢に変化が生じたことも考慮する必要はあろう。すなわち、政治の側からの伝統の濫用である。因みに、今日では、集団的な儀礼の意味付けでは、政治的な図式が重要な役割を果たしている。現在、ハロウィン論議に最も強く関与している政治政党は右派で外国人敵視の傾向をもつ北部同盟であるが、彼らは、一面では、ハロウィンを前キリスト教というアイデンティティの表現とみなしつつ、他面では、カトリック信仰をイスラームの脅威なるものに対抗しているとして擁護する。同政党はまた、伝統的な家族の価値をまもるべきことを説いている。家族の意義を大事にすることはカトリック教会の強くもとめるところであるが、死者儀礼の維持もそれと関連している。いわゆるポピュラーな伝統がいかにニュートラルではあり得ないかについて、なお証明材料が必要なら、これがそれに当たるであろう。〈新しい〉伝統は、消費動向の変化の結果として成り立つところがあるであろうが、それが、突然、政治的な帰属問題という大きな分野に延びてゆくのである。

<sup>15</sup> Corriere della Sera, 30. Oktober 1999.

## 2.7. ハロウィンの多面性

私見を言うなら、ハロウィンは、死者信奉とは連続したものとするべきではないであろう。たしかに、形式的、また行為の面で多くの類似点がみとめられるとしても。死者信奉は、死者を追憶するための通夜である。他方、ハロウィンは、死を生へと呼び覚ませる遊びである。前者は、家族的な感情と具体的な個人と結びついている。後者が関わるのは、抽象的・没歴史的次元であり、そこには暗黒のホラー美学と馬鹿々々しいような恐怖観念が重なっている。ディスコは、そうしたコンビネーションに打ってつけの場を提供する。そこで目にするコスチュームは、徹頭徹尾、ハリウッド風である。そこでは、亡くなったばかりの叔母や逝いて間もない祖父の仮装を着けようとする者はいない。イタリアでのハロウィンは、何よりもカーニバルと親近であり、カーニバルの特徴である空間と時間の転倒の原理も共有される。

疑問の多い連続性を再構成したり、あるいは古い伝統に新たな読解を結合する代わりに、私は、古い現象と新しい現象を分け隔てる観点を提示したい。一方には、意義を減退させつつあるカトリック教会の伝統があり、そこでは人は物故者を偲ぶためにプライベートな領域に引きこもる。他方、ハロウィンは娯楽の王国で、カーニバルと親近である。そこで起きるのは、プライベートな帰依ではなく、それとは正反対の集いである。

死者信奉には、数多くの、地方的な差異を伴うヴァリエーションがある。中心には死者との交流をめぐるカトリック教会の教理があり、それが解釈され、実践される。その行事は衰退しつつあり、実際には僅かなグループによって行なわれるに過ぎなくなっている。もっとも、イタリア半島全域に分布する死者祭儀の行事がかつて豊かで多彩であったことは、誰もが知っている。墓地を訪れて飾り付けをし、そのために特別に拵えた料理があり、また子供たちにはプレゼントがあたえられる。これらの行事には内的な同質性があり、死生の観念と関連し、また教会堂の信仰体系につながっている。それらは、家族の役割と密接であり、同時に集団的なアイデンティティの表現としても重要である。これらすべての特徴を、ハロウィンは持っていない。しかしハロウィンは、年を追うごとにポピュラーである度合いが増しており、その担い手も社会的に幅を広げる一方である。ハロウィン伝統の母体はエンタテインメント（時には死ぬほど退屈なものもないではないが）である。対照的に、死を齋きまつるカトリック教会の手法は、フォークロアの形態にある場合でも、娯楽の分野には（もっとも、時には行き過ぎや笑いをさそう添え物が排除されないとは言え）属さない。また伝統的な死者信奉の一部として各地で行なわれてきたプレゼントの習俗は、決してハロウィンにおけるような強迫観念じみた商業主義を前提としていなかった。他方、ハロウィンの現実には、それに関心をもつ評者の目を、ディズニーから悪魔

崇拜のロックスターを経てホラー映画にいたる文化産業<sup>xvi</sup>に向けさせずにはおかない。さらに、文化産業と切り離し難く織り込まれた現象として、ハロウィン是一般の目に見えるものであることを必要とする。この点が私たちをして、メディアに、そしてこの（少なくとも現実には）成長しつつある伝統の中心的な伝播者としてのメディアの役割に注目させるのである。メディアの報道は、正当性をめぐる闘いの表現であり、そこに政治的・文化的な諸勢力も引き入れられる。あらゆる伝統におけると同じく、ハロウィンの場合も伝統である以上、ランクリュドが指摘するように、自己の両親をもとめるものとしての伝統が重要になる<sup>16</sup>。そしてそれを肯定するにせよ批判するにせよエキスパートが示すのは、日常生活におけるエスノロジーのアクティヴな役割である<sup>17</sup>。

[付記] 本稿の成立に当たっては、2000/01 冬学期の企画「ポピュラーな伝統」(“Tradizioni Popolari”)に参加して研究を共にした諸氏、とりわけヴァーニャ・ガッピ (Vania Gappi) とロベルタ・ルスコーニ (Roberta Rusconi) に感謝する。

英語からドイツ語への翻訳担当：Guido Szymanska

#### [参考文献]

- Bravo, Gian Luigi 2001, *Italiana, Racconto etnografico*. Meltemi, Roma.
- Clemente, P. 1978, *Il cavaliere e il cotadino: note sullo spettacolo popolare nel senese*. In: Teatro pololare e cultura moderna, a cura di Teagtro Regionale Toscano. Valecchi/Firenze, pp. 169–181.
- De Martino, E. 1959, *Sud e Magia*, Feltrinelle. Milano.
- De Martino, E. 1958, *Morte e piano rituale. Das lamento pagano al pianto di Maria*. Einaudi/Torino (poi Boringhieri).
- Falassi, A. 1980, *Folklore by the Fireside. Text and Context in the Tuscan Veglia*. University of Texas Press, Austin.
- Falassi, A. (a cura di) 1988, *La Festa*, Milano [Electa].
- Ferretti, R. 1983, *Il Maggio appassionato delle anime sante des Purgatorio, cantato a Marrucheti*. In: *Fiesta*. 1983, pp.66–75.
- Fresta, M. (a cura di) 1983, *Vecchie segate ed alberi di maggio: percorsi nel teatro popolare toscano*. Grosseto [Archivio delle Tradizioni popolari della Maremma Grossetana].

<sup>16</sup> (p.14) Lenclud, G. 1987, *La tradition e'est plus ce qu'elle itrait*. In: *Terrain*. 9 (1987), pp.110–123.

<sup>17</sup> (p.14) Köstlin 1996.

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (2)

- Köstlin, Konrad 1996, *Perspective on European Ethnology*. In: *Ethnologia Europaea*. No.26, pp.169–180.
- Lappuci, C. 1988, *Il libro delle beglie: Racconto popolari di Divoli, Fate et Fantasm*. Garzanti / Vallardi, Milano.
- Lappuci, C. 1991, *L'era del focolare*. Ponte alle Grazie / Firenze.
- Lenclud, G. 1987, *La tradition e'est plus ce qu'elle itrait*. In: *Terrain*. 9 (1987), pp.110–123.
- Morbiato, L. 2001, *Le «traditions invetées»*. In: *La Ricerca folklorica*. 42, pp.155–156.
- Mugnaini, F. 1997, *Carnevale senza quaresima, tradizione senza passato. Il Carnevale e le algre feste nella provincia di Siena*. In: Grimaldi, P., (a cura de), 1997, *Maschere e corpi: tempi e luoghi del Carnevale*. Meltimi / Roma, pp.79–94.
- Mugnaini, Fabio. 1999, *Mazzasprunigliola. Tradizione del racconto nel Chianti senese*. L'Harmattan Italia Torino.
- Mugnaini, F. 2000, *«Le veglie: forme di sciabilità nella mezzadria toscana»*. In: *American Journal of Italian Studies*, Vol.23, No.61/62, pp.177–212.
- Satriani, Lombardi / Meligrana, M. 1982, *Il ponte de San Giacomo. L'ideologia della morte nella società contadina del Sud*. Rizzoli / Milano.
- Schenda, Rudolf 1994, *Folklore y cultura de masas*. In: *Revista de Dialectología y Tradiciones Populares*, XLIV, I., pp.25–38 (orig. 1991 In : *Schweizerisches Archiv für Volkskunde*, 87, p.17–27.)

### 【訳注】

- i (p.162) 紫の薄物のケープ：蜘蛛の巣に見立てられたものであろう。
- ii (p.162) ジャック・オ・ランタン風のパンプキン：ハロウィンで一般化している中を剥いて蠟燭を灯したカボチャのこと。起源説話として“Jack o'Lantern”という悪魔に魂を売りわたした男が罰としてカブラ（アメリカでカボチャに変わったとされる）のなかを永遠に彷徨っているとされ、またケルト文化から発しているとされるが、ランタンの語をもとにした後世の説明である。
- iii (p.162) ティム・バートンのテレビ・アニメ「ナイトメア・ピフォア・クリスマス」：“Nightmare before Christmas”：ティム・バートン (Tim Burton born in 1958) が1993年にはじめ絵本として着手し、同年映画化した。原作・製作ティム・バートン (Tim Burton), 監督ヘンリー・シリック (Henry Selick)。年中ハロウィンの架空の町ハロウィン・タウンでカボチャの大王ジャック・スケルトンがクリスマス・タウンを垣間見て、クリスマス作りをはじめることによって異変が起きる。
- iv (p.162) ジャック・スケルトン (Jack Skeleton)：上記のアニメ映画「ナイトメア・ピフォア・クリスマス」に登場するメイン・キャラクターで、カボチャの頭と針金のような骸骨男だが、心優しい怪物。ジャックの名前は、ジャック・オ・ランタン伝承を踏まえているようである。
- v (p.164) 人狼（おおかみ人間, 独 Werwolf, 英 werewolf 伊 lupo mannaro)：狼の頭をした異様な人間のイメージはヨーロッパの中世後期にまで遡り、近代にも各地で多くの話類が収集されるなど一般的な民間伝承であった。また現代史ではナチス・ドイツが第二次世界大戦末期に占領地の維持のため

めに突撃隊やヒットラー・ユーゲントなどから成るゲリラ戦術の“Werwolf”部隊を組織したこともあってドイツ語の術語が広まっている。さらに今日ではそれらにヒントを得たゲーム・ソフト“The Neighbour Wolves”（人狼審問）等が人気を博している。

- vi (p.166) ルチアーノ・モルビアート (Luciano Morbiato) : 現在, バドヴァ大学 (Padova) 哲学部の客員教員として文化人類学を担当しているようである。
- vii (p.166) ジャン・ルイーゼ・ブラーヴォ (Gian Luigi Bravo) 現在, トリノ大学・文化人類学正教授。
- viii (p.166) ルイーゼ・ロムバルディ・サトリアーニ (Luigi Maria Lombardi Satriani) : 1936年カラブリア州に生まれ, ローマ大学で政治学を専攻し, 現在はローマのラ・サピエンツィア大学で文化人類学の正教授。
- ix (p.168) <シャーマンたち> (Samanen sic!) : 原文に注視記号があるように, ハロウィンとシャーマニズムは関係がないであろうが, せめて綴りだけでも“伊・複 sciamanos”や“独・複 Schamanen”とあるべきところ, うろ覚えの単語と知識がハロウィンに使われたことに論者は注意を促している。
- x (p.168) カリフォルニア・ボーイズ (California-Boys) : アメリカのロックンロール・バンド“The Beach Boys”が1965年にリリースしたアルバム“Summer Days (And Summer Nights!)”のよく知られた一曲に“California Girls”があり, 特にそれとの連想で北米のウエストコーストに集う若者をCalifornia Boysという言い方が広まったようである。なお同グループは1961年にウィルソン3兄弟 (Willson, プライアン Brian born in 1942 / デニス Dennis 1944-83 / カール Carl 1946-98) を中心に5人で結成され, 以後, 入れ替わりや当初メンバーのうち数人の逝去に遭い, また中断をはさみつつも今日まで続いている。結成もカリフォルニアにおいてであり, 初期には, サーフィン, ビキニ娘, 自動車といったアメリカ西海岸の若者文化を多く歌い, バンド自体が「カリフォルニア・ビーチ・ボーイズ」と呼ばれたこともあった。
- xi (p.168) 聖アンドレアス : 次章「ハロウィンの再発見」(スペイン)の訳注 viii を参照。
- xii (p.169) 悪魔崇拝者 (Satanist) : “Satanism”は中世末以来, 正統的なキリスト教会からの逸脱に対して投げかけられてきた呼称であるが, ここでは20世紀後半に起きた悪魔を尊ぶことを主張するカルト的な運動を指す。幾つかの系統があるが, 特にアメリカで起きた「サタン教会」は影響力が大きい。創始者アントン・サンダー・ラヴィー (Anton Szandor LaVey 本名 Howard Stanton Levey 1930-1997) はシカゴに生まれサンフランシスコで育った。高等学校を中退してサーカス団に入って猫を扱い, ミュージシャンとして活動し (自伝には無名時代のマリリン・モンローとも接触があったと記す), また世界各国を放浪した後, 1966年4月30日, すなわちワルブルギスプルの夜にサンフランシスコで“Church of Satan”を創始し, 次いで1969年に“The Satanic Bible”を刊行した。多くの著作があるが, 悪魔を大地の原理とみなし, 物質主義と個人主義を尊び, またビート調のミュージックや動物殺傷などによって力と生命力の発露を演出するなどで賛同者を獲得した。イタリアでもラヴィー系の悪魔崇拝の若者の活動が屢社会問題化した。
- xiii (p.170) 「コリエーレ・デラ・セーラ」紙 (Corriere della Sera) : 直訳すると「イヴニング急報」の意で, ミラノを拠点とするイタリア最大部数の日刊新聞。; エルネスト・ガッリ・デラ・ロジッア (Ernesto Galli della Loggia) : 1942年ローマに生まれたジャーナリスト, 政治・文化にわたって多数の著作がある。
- xiv (p.170) 社会学者デ・マーゼ : ドメニコ・デ・マーゼ (Domenico De Masi) を指すと思われる。デ・マーゼは1938年にローマに生まれ, ローマ大学で社会学を学び, 建築文化財の研究所に属した後, 現在も文化財保護やポストモダン社会学について活動をしている。



## ヨーロッパ諸国のハロウィン (2)

- <sup>xv</sup> (p.171) ミラノのマルティーニ枢機卿 (Cardinale Martini) : 本名 Carlo Maria Martini, 1927年にトリノに生まれ, 1944年にイエズス会へ入った。イタリアの諸大学で神学の研究をおこない, 司牧と教授職を務めた。1979年にミラノの大司教となり, 1983年に枢機卿に昇った。2005年の教皇選挙では決戦で枢機卿ヨーゼフ・ラッツィンガー (ベネディクト16世) に譲った。
- <sup>xvi</sup> (p.174) 文化産業 : ドイツ語の訳語は “Kulturindustrie” で, アドルノとホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』 (Max Horkheimer / Theodor W. Adorno, Dialekt der Aufklärung. Amsterdam 1947.) において大衆文化論のキーワードとして提唱された。

## ハロウィンの再発見

ホセフィーナ・ローマ (バルセロナ/スペイン)

[原タイトル] Josefina Roma (Barcelona), *Halloween – wiedergefunden*

私たち人類学の研究者は、初期の諸民族のあいだの文化現象の広がりを話題にしたり、それを言語表現の歴史展開に適用するときには、それらのテーマを多大の尊重をもって取り扱い、事態の推移を情熱を傾けて観察する。それに対して、同様の現象でも現今に関わるもの、しかも誰もが知っている人物が関係しメディアも関与しているとなると、研究と言っても思い入れは起きず情熱も掻き立てられない。ありふれた世相と見て、研究に値しないとみなし、それどころか頭から拒否してしまい勝ちである。まことに不可解なことだが、その種の事象を前にすると、過去の事象はそのサイクルの完成形態で、そのかたちのまま永久に生き続けているかのように受けとめ、文化のダイナミズムが当該の文化圏でもあらゆる契機において作用することを看過する。増してや、アメリカ合衆国が地球上のすべての社会に及ぼす強力な影響力となると、現象の全体に内在するものとして文化崩壊の圧力、それどころか暴力を見てしまう。しかもそのときには、文化崩壊と言っても同じ細部からなるものは過去にはまったく知られていなかったこと、また今日比較的抵抗無くひろまっているものでもその独自の位置や価値評価では崩壊現象にみまわれていること、さらに従来優勢であった一般的趨勢や民俗行事における指導的観念が低落をきたしていることに直面するや、その崩壊現象を躍起になって追求すること、こうした動きには一向無頓着なのである。

祭り行事の変貌を考えると、これらすべてが当てはまることが判明する。例えば、11月1日の万聖節である。カタロニア<sup>1</sup>だけでなく、ヨーロッパの各地で、万聖節は、カレンダー上の大きな祭礼となっている。そこで、始めに、この祭礼の歴史を思い起こしておきたい。

古代ローマ時代以前や古代ローマ時代のヨーロッパでは、そこに存在したすべての文化において、祖先はさまざまな形で崇められた。死者には祖霊となるにあたって通過しなければならない過程があり、それらを綴って彼岸のイメージができていった。しかし死者はその神秘的な行程を踏破する手立てを自らはもちあわせず、血縁者や友人や隣人による宗教的・社会的な支えを必要とした。さまざまな形態での葬礼や儀礼が家族の側の予防薬的な措置としておこなわれた。すなわち飲食を共にすることから、死霊を退散させるための騒音までであるが、それだけでなく、さらに、死者を祖霊の世界である高みへと遅滞無く送るための儀礼も加わった。それは死者にも生きている者にも重要であった。なぜなら、他

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (2)

者に危害を加え、汚し、それどころか死へと引き連れることは、死者のみがなし得るからである。他方、その敷居を一旦超えると、死者は祖霊となり、自己の眷属に助けをあたえることができるのである。そこで死者は呼びかけられる。そして死者は子孫を気遣い、年間の決まったの時期に彼岸の扉が開かれるや、子孫を訪ねる。かくして、二つの世界は触れ合うことになる。

かかかかる意味合いにある祭礼は、夏から秋への変わり目に祝われる。それは、ヨーロッパのキリスト教以前の多くの民族のあいだで行なわれたが、特に知られているのは、ケルト民族の〈サムハイン〉(Samuhin)<sup>ii</sup>で、11月1日から11日のあいだに催された。

キリスト教は、死者と生者をめぐる合理的な伝統的な見方の上でラディカルな変化をもたらした。原始キリスト教には、生命を賭して信仰をまもった殉教者の外には祖霊はあり得なかった。殉教者には死の行程は短縮され、彼らはただちに祖霊、すなわち聖者となった。他方、一般の物故者については、神の恩寵に参入するとは直ちには断言できなかった。それゆえ、祖先信奉は常にいかがわしいものとならざるを得なかった。死者の魂が救われるのか、断罪されるのかを、自信をもって語ることは誰にもできなかった。そのため、祖先信奉は殉教者に集中しておこなわれることになった。殉教者たちが、特定の土地との結びつきによって近親者との絆を補ったのである。

しかし、長い道程を経て、〈全殉教者〉の祭日は制度化され、その聖遺物は厳かにパンテオンに奉遷された。この春季の斎期の祭りは、本来必要であった光輝を發揮したのではなかった。時と共に、教会は、本来の殉教を遂げたわけではないが模範的な人生を送った人々を聖者とみなすようになった。神聖な信仰の証人たちの数は増え、同時に、死者が祖霊になる過程に関する古くからの教義がガリアの教会において正式な位置を占めることになった。かくして9世紀には、ルイ敬虔王とケルトの伝統に親しんだ司教たちの影響の下、万聖節なる教会祭礼が11月1日に置かれることとなった<sup>iii</sup>。より詳しく言えば、〈サムハイン〉が祝われてきた日取りである。また、多少の時間幅を考えると、古代以来の種々の宗教にとって重要であった期日であり、キリスト教化のなかですら多くの古い伝承が持ち伝えられてきたカレンダー上の節目であった。

それからさらに一世紀を経て、ようやくクリュニー修道院のオディローが万霊節を制定した<sup>iv</sup>。オディローはこの祭礼を祝った最初の人であり、その祭りは程なく一般に催されることとなった。この2つの祭礼日に相次いで行なわれる行事と儀式には正反対の性格が含まれていることは確かである。カタロニアとアラゴン<sup>v</sup>、またその他多くの場所で、万聖節には墓地へのお参りが行なわれ、近親者の墓を花で飾る。それゆえ、その日は、墓地を訪ねることに対して恐怖は起きないのである。カタロニアでは、その日のためにアーモンドと松の実で揜えた菓子を手製で作る。それは、カタロニアでは〈Panelllets〉と言うが、

要するに栗の意味で、「ラ・カスタナダ」(La Castanada 栗祭り)の名称を保ってきた。この菓子は、祖先への古くからの供え物の一部である。すなわち、ナッツのような腐らない食べ物を尊んだわけだが、それは永遠の生命のシンボルであった。この供え物は、彼岸の門が開き、祖霊が我が家を訪れることと対応していた。灰のなかに鳥の足跡が見つかる、そうした訪れの標とみなされたものである。万聖節の夕べには、何もかもが、霊界の高みへの途上にある死者に向いた。20世紀の50年代までは、家族全員が集まって、物故者のためにロザリオ祈禱<sup>vi</sup>の三部分を唱え、その魂を煉獄から救い出すことを願った。すなわち、祖霊が、死者が祖霊の段階に向けて苦しくも浄化の道程にあることをキリスト教的に表現したのであった。

ファンロ (アラゴン州ソブラルベ県 Fanlo – Sobrarbe, Aragon) でフィールドワークを行なったときのことだが、一人の婦人が体験を語ってくれた。1940年代のことで、彼女はまだ少女だった。家族が、先唱の女性の後について家族がロザリオの祈りを唱えていたとき、突然得も言われぬ美しい鳥の囀りが響きわたった。驚くと共に、皆が耳にしたものと思っ、その意味を尋ねたところ、誰もそれを聴いてはいなかった。ロザリオの祈りを唱え終えてから、信仰に篤い人であった叔母が、鳥の囀りが何であるかを教えてくれた。それは魂が煉獄からやって来たもので、彼女たちの祈りによって、神の慈悲がはたらいて、魂は煉獄は抜けてきたのだった。先にもふれたように、鳥の姿は祖霊が現れたものと解されてきたのである。

万聖節の祈りの間、町村体は鐘を鳴らすことによって護られるとされ、そのため鐘音は夜中続く。それは、誰も墓地へ行こうとしない恐ろしい夜であった。因みに、多くの土地で語り伝えられているものに、二人の法螺吹きの話がある。二人は、墓地の門まで行くという賭けをする。そして一人が、墓地にたどり着いて、着ていた服を吊るすが、胸が締め付けられるような苦しみを覚え、恐怖のために死んでしまう、と言うのである。

翌朝、すなわち万聖節の当日になると、すべての教会堂でミサが行なわれる。魂の煉獄の苦しみを描かれた絵図がかかる祭壇は無数の蠟燭の灯りで飾られる。伝統的に死者を導くためとされてきた光景である。この儀式は、死者を生者から遠ざけようとするもので(騒音)、また死者を正しい行程によって祖霊の世界へ送るものでもあった(祈り、ミサ、灯火)。

かかる死者への恐れと畏敬には反対する種類の行事に、古くから〈あんちゃん〉(mozos)と呼ばれてきた若者たち(もっとも少女も混じっているが)は与したのである。その反対の行事とは、カボチャを削りぬいて目・鼻・口の形の穴をあけ、中に蠟燭をともすことであり、死者の頭に灯りともっている外観を呈した。この灯火を携え、白いシートに身体を包んで、あんちゃんたちは歩き回り、最後にそのカボチャを、娘たちが夜ないしは早朝に工場へ出勤する道筋に吊るしておく(例えば次を参照, Ripoll, Catalonia)。かく

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (2)

して、死者への恐れに対して生物学的にも最も敏感な社会的存在である若い少女たちを怖がらせるのである。この習俗は、相互に遠く離れた場所であるエル・セグリア (El Segria, Lerida 県) やエル・バイフ・キャンプ (El Baix Camp, Tarragona 県) などで記録されている。

当のファンロ (Fanlo) でも、20世紀半ばのこととして、次のような出来事を聴き取ったことがある。若い男性たちが集まって、先に挙げたような繰りぬいたカボチャで人を怖がらせる。彼らは、白いシートで身体をすっぽり包み、頭の上にカボチャを載せる。かくして、死者の格好になるが、背丈は通常の間人よりずっと高くなる。その扮装で青年たちは、老人や一人暮らしの家々を訪れて、詩篇を歌う。〈生きてあるとき、我らはこの道を歩みたり。／今、我らは死者となりて、この庭に来るなり〉。歌うと共に、青年たちは庭の果樹から果物をもぎ取ってゆく。このカボチャと蠟燭で隣人たちを恐がらせる習俗は、北はピレネー山脈から、南はカタロニアやアラゴンの南部まで広く行なわれていた。

この20年間に、二つの大変興味深い動きが起きた。一つは、学校教師 (始めは小学校、やがて中学校にも広がった) が、前代の政権下では抑圧されることもあった文化的伝統への関心を強め、学校を、伝統的な祭りを復興させる一つの拠点にしていっていったことである。すなわち、カーニヴァル、〈栗祭り〉 (Castanada)、万聖節の前の数日、その他である。それだけでなく、学校は、特に大都会では、昔は家庭や同年代者や街路や地区や村全体で行なわれていた行事を受け伝えることを自己の課題と見るようになった。

さらに、これら全ての加わった要素に、学校教師が、学校の授業を聖俗分離に沿って推進したことが挙げられる。すなわち、宗教的側面をできるだけ排除し、どの祭り行事にも含まれていた世俗的な部分を過大なまで取り上げ、逆に宗教性を犠牲にしていっていったことである。例えば、〈栗祭り〉は、万聖節における宗教的な名残りを払拭して成長したもので、年中行事におけるグルメの祭りになっていった。

伝統的な宗教的要素は若い世代のあいだではまったく存在しないか、僅かしか見られないにも拘わらず、死とあの世のテーマの秘密は、少年少女たちが取り組む中心的なテーマである。医学やメディアを動員し、永遠の若さを謳って現実を糊塗しようとする一般の趨勢も、人間が死に対してもつ恐れを解決するわけではない。怪物、あるいはあの世からの優しい来訪者が登場する映画は人々に歓迎されている。ハロウィンは、これら一連のフィクション製作のシナリオの一つでもある。ハロウィンの祭りは、起源のヨーロッパを越えてアメリカ合衆国で、すべてが逆さまになる祭りに成長した。仮装がなされ、子供たちは近所をまわって金銭をあつめる。要するに、カーニヴァルである。若者たちが仮装し、死者の顔を模したくりぬいたカボチャを持って家々を訪れて金銭をあつめるのだが、その暴れまわる若者たちのなかに、あの世からの殺人者など、アメリカ映画から取ってきた危険な要素と神秘が混じるのである。

その普及においてみとめられるのは、常識を超えた祭りのあり方がアメリカをモデルとしていることで（その点では本質的にモダンでもあるが）、それゆえ若者たちのあいだに反響を呼んだのであった。若者たちの集団や、かつて<栗祭り>（これ自体、万聖節の聖俗分離のヴァージョンと言えよう）を催していた大人たちの団体がこの新しい仕様に飛びついたのである、それ故であったろう。

3年前から、11月1日の前夜に催される若者たちの祭りは、ハロウィンとは言わずに<栗祭り>と呼ばれるようになった。しかし、それが唯一の変化だったわけではない。その内容も、いわゆる魔女やあの世の存在のコスチュームとされる仮装に影響した。しかもその大半は、ハリウッドを模したものだ。その際、どこでも、死者の頭の形に割りぬき、中に蠟燭を灯したパンプキンが現れた。

これらの世代が、スペインの村々でも行なわれてきた奇矯で破格的な伝統を知らないのは、当然である。因みに、その伝統は、深刻な死者祭礼への並行的かつ対抗的關係に立っていたのである。

その伝統が知られていなかったのは、若者たちに<栗祭り>を仲介した世代ですら無視していたことから分かる。その世代は、本物の伝統を持つことを確信し、新しい祭りが入り込むことには不愉快を感じて抵抗した。彼らは、自分たちが、ローカルでナショナルなあり方の深奥にあると感じたのである。

ここで起きているのは、三聖王<sup>Ⅲ</sup>に対して、メディア、殊に映画のプレステージを帯びてサンタクロースが出現したことに似たところがある。両者の関係は、大層注目され、また議論の的ともなっている。幼児イエスを礼拝したオリエント出自の三聖王という宗教性がサンタクロースによって解放されたと見て、新たな展開を喜んだ向きがある一方、サンタクロースは伝統に対立するアメリカ文化の所産で、しかも消費を煽る敵対者として忌避する人もいる。大方の人々は、二重のチャンスプレゼントの習慣に活用して、自己の位置を確かめる縁としているが、また、その強い消費傾向の故に、両方のチャンスから逃げる人々もいる。

ハロウィンは、そのチャンスについて事前に考える暇もなく、私たちの文化に接木されたのだ。とまれ、それが現実であり、若者たちは、いとも簡単かつ無批判に、また連続性への断絶を意識することもなく受け入れている。しかも、彼らは、そのとき映画のスクリーン上のできごとを自分たちのリアルな現実の延長とみなしている。しかしまた、そこに文化の崩壊を見る世代も、二つのことがらを見逃している。一つは、<栗祭り>を催す古い行き方も決して幽遠な上古に遡るわけではなく、それはそれで、彼らの先立つ世代がすこぶる宗教的な儀礼行事に傾いていたことに対する革新であった。第二は、伝統に沿った地元の祭りが、すでに、今日から見ると異国の影響を推定できるような要素を含ん

でいることである。例えば、灯火を仕込んだパンプキンや、少年少女が近隣をまわって金銭を集めること、聖アンドレアス (11月30日)<sup>viii</sup> や聖カタリーナ (11月25日)<sup>ix</sup> やその前後の時期に同年者や男女それぞれがグループを組み、説教へのお布施として金銭をあつめること、また腰に牛につける鐘を結わえて死霊を退散させることや、あるいはそれらが帯びる芝居気へのことさららしい反抗などである。

伝統的な田舎の祭りの時代から僅か3世代が経過したに過ぎない。また学校を中心にした聖俗分離的な復興が起きてからもでも未だ1世代か2世代に過ぎない。しかし文化崩壊への敷居を越えたのは、今日の世代からであろう。しかも彼らは、彼ら自身の文化遺産を発展させることを現実になし得ていず、またそれを意識してもいない。

スペイン語からドイツ語への翻訳担当：Sonja Konrath-Schling

### [訳注]

- i (p.178) カタロニア：スペイン北東部で中心都市はバルセロナ。筆者はバルセロナの在住とあり、以下ではハロウィンの期日に行なわれる〈栗祭り〉(Castanada) に強く留意しているが、これはカタロニア地方の習俗でもある。
- ii (p.179) 〈サムハイン〉(Samuhin)：これについては、前号に記載したパトリシア・ライサート「アイルランドのハロウィン 一連続性と変容」を参照。
- iii (p.179) この箇所の原文は10世紀のこととなっており、その年代の勘違いが人物の混同にもつながっているため、訳文のように9世紀として史実に合うように訂正した。なお、万聖節がケルトの影響によるものであったとも断定はできない。一般に万聖節(独 Allerheiligen) と呼ばれる「諸聖人の祝日」(Festum omnium sanctorum / Omnium sanctorum dies) は教皇グレゴリウス4世(844没)の施策の性格が強く、それがフランク王国のルイ敬虔王(在位813/14-40)が835年にその記念日の受け入れることにつながったと見る方が無理がないであろう。また背景としては、初期キリスト教が聖霊降臨節後の第一日曜を諸聖人の日としており、それにローマのパンテオンの記念日が重なり、さらに教皇グレゴリウスが11月1日に移動させたことによって成り立ったと見るのが通常である。
- iv (p.179) オディローが万霊節を制定：クリュニーの大修道院長オディロー(Odilo von Cluny)は、998年に、諸聖人の祝日の晩課の後に死者のために鐘を打ち死者聖務を行なうと共に、翌日11月2日に司祭が死者ミサを執り行なうべきことを傘下の修道院に命じた。これが、奉教諸死者の記念(Commemoratio omnium fidelium defunctorum)すなわち万霊節(独 Allerseelen)となっていた。
- v (p.179) アラゴン：カタロニアの西に隣接する内陸地域で、中心都市はサラゴサ。
- vi (p.180) ロザリオ祈禱：ロザリオ(数珠)を繰りながら、神や聖者の徳称を唱えるもので、その最も代表的なもので頻繁に唱えられる「聖母マリアの連禱」を指すことが多い。
- vii (p.182) 三聖王：日本では「東方の三博士」と呼びならわしているが、ヨーロッパでは三人の王と解され、また後に白人、アラビア人、黒人の代表ともみなされるようになっていく。そのため児童な

どが扮するときには一人は顔を黒く塗るのが一般的である。三聖王が新生児イエスに挨拶をした三王礼拝が御公現で、西欧キリスト教では1月6日とされてきた。

viii (p.183) 聖アンドレアス (Andreas) : 例祭日は11月30日。使徒の一人。シモン・ペテロと兄弟で、イエスに最初に従った弟子の一人とされ (ヨハネ伝 1,35以下)、また伝承では各地を布教の後、十字架上で殉教したとされる。

ix (p.183) 聖女カタリーナ (Katharina) : 例祭日は11月25日。伝説では、古代ローマ帝国のマクセンティウス帝 (Maxentius) 時代にアレクサンドリアに生きたキリスト教の殉教者。50人の哲学者と宗教論争をしたとされ、また車折きの刑を天使の計らいで免れた後、斬首されたとされる。この聖者を表す造形芸術作品は12世紀頃からみとめられる。



## ノルウェーのハロウィン

アーネ・オールヴィック (オスロ／ノルウェー)

[原タイトル] Ane Ohrvik (Oslo), *Halloween in Norway*

ノルウェーのハロウィンに関する研究は、プロジェクト「北欧諸国における仮面と仮装」として進められている。プロジェクトは、北欧（スカンディナヴィア）における仮装・仮面伝統に焦点をあてた記録・調査であり、文化史と現代の様相の両面を見据えている。プロジェクトは今年始まったばかりで、3年間継続の予定である。本稿は、ノルウェーにおいて人々が実際に経験したことがらの記録に基づく。すなわち、ノルウェー各地の新聞報道、ハロウィン・イベントの観察の成果、ハロウィンをめぐる会話、絵画やビデオや映画などに注目して作成した。扱う内容は、今日のノルウェーでハロウィンが催されるときの様態はどうか、誰がそれを行なうのか、行事の進行はいかなるものか、さらにハロウィンがどう見られているか、といった諸点である。

### ハロウィンの祭り

ハロウィンの祭りは、ノルウェーではきわめて新しい現象である。この2、3年のあいだに、10月31日の祭りは、ノルウェー全土で著しく増加した。短いタイム・スパンにも拘わらず、映画やテレビ番組やニュース、北米文化にルーツをもつことに関する書籍などを主な媒体とした外国の仮面行事ないしは秋祭りの伝統から、ノルウェー人自身が直接知り見聞し自ら開催するものに変わってきた。ノルウェーでのハロウィンは、これまで、主にイギリス人学校やアメリカン・スクールないしは英語を話す移住者と関係した閉鎖的な空間においてであった<sup>1</sup>。しかし、この僅か数年のあいだに、ノルウェー全土とまでは言えないにせよ、疑いもなく全国の多くの場所で観察されるようになっていく。行事の中心になるのは、小学校の子供たちや中学・高校生、それに二十歳代の若者である。しかし、家庭の催しとしては一般的となっていない。またその最初の大波が都市の現象であったことも概括的な特色である。

昨年、10月31を前にした数日間に、首都オスロで開催されるハロウィン・イベント

---

<sup>1</sup> そうした事例には、ハロウィンがスウェーデンにおいて示した位置や展開や拡大との並行がみとめられることは、拙論で取り上げた。参照, Agneta Lilja 1998, p.59-92.

を巡り歩く特別ツアーが企画された。掲示板、外壁、広告塔、バーやクラブなどといった目につきやすい場所に広告が出され、〈ホラー・パーティー〉、〈コスチューム・パーティー〉、〈ハロウィン・パーティー〉などの名称の派手な宣伝であった。イベントで実際に繰り広げられたのは、人の度肝を抜くような各種の小道具、恐ろしい骸骨、恐怖の仮面、黒い小さな〈クリーピーとクローリーたち〉<sup>i</sup>などで、またそこにアルバイト従業員の面々がドレス・アップして付き添った。入場料あるいは飲み物代は、決まって〈殺し屋への報酬〉(blood money)の名目で支払うのだった。さらに、参加者に対しては、考えられる限り恐怖をそそるコスチュームを着けることがもとめられ、賞金も出るとの案内がなされた。なお昨年はハロウィンは火曜だったが、調整されて、その前の週末あるいはその週の終わりに移された。

こうしたレストランやエンタテイメントの関係者が企画するハロウィンのイベントは、この数年ノルウェーの大きな都市では広まる一方である。参加者は18歳から30歳までの若者が圧倒的に多い。フェスティバルの主な意義は、人々に特別の装いを着け、ホラーと驚愕をメインテーマとする集いに参加する機会を提供することにある。またこれらのイベントでは、アルコール類を飲むことも、中心の一つである。

こうして都市の風物となってきたハロウィンだが、そこには別の光景も見受けられる。ハロウィンから発した一連の効果と言えようが、ノルウェー全土でパーティー用品や玩具の店舗でその種のディスプレイが増えているのである。ぞっとするような仮面や衣裳、オレンジ色のライト、回転式の蜘蛛やその他の毒虫が登場して、恐怖と嫌悪を掻き立てるといった趣向である。それらの店舗は、この数年、ハロウィン関連の衣裳やアクセサリーの売上を大きく伸ばし、独自商品の開発にも取り組んでいる<sup>2</sup>。フラワー・ショップや青物店もイベントのデコレーションあるいは食材としてパンプキンを扱うようになり、これまた売れ行きは好調である<sup>3</sup>。

若者のクラブ、また子供や若者にレジャー活動を提供する種々の団体や組織が牽引役となって、この2年間に、ハロウィンは大層一般的なものとなった。そこでは仮装と仮面が中心で、恐怖と驚愕を掻き立てるのが要点である。そのため参加者に向けてお化け屋敷が設けられることも多くなっている。子供や若者は、そうした場所では、仮設コーナーを順番に廻って、怖い作り物や恐ろしい衣裳の人物を目にし、回転式の小道具にふれ、悲鳴を耳にする。恐怖や嫌悪を掻き立てる映画が映され、幽霊話が語られる。同時に、歴史的な

<sup>2</sup> 次の新聞報道を参照、Aftenposten 20.X.2000.; Drammens Tidende 28.X.2000.; *Hamar Dagblad* 08.XI.2000.

<sup>3</sup> 次の新聞報道を参照、VG 29.X.1999.

側面が組み込まれていることも多く、参加者はハロウィンの歴史的背景について説明を受ける。すなわち、黎明時代に遡り、キリスト教を経過して、現在のアメリカ的な表現に至る経緯である。そうした催し物の中心は大人に近いヤング・アダルトであるが、学校へ通う少年少女やヤング世代の参加も進んでおり、特に〈ハロウィン・ディスコ〉が活発になっている。またイベントに先立って、学校の生徒たちは、催しの歴史的背景について教師から教わることも少なくない。それによって、生徒たちは、イベントを広い意味での文化史的な文脈のなかに位置付けるチャンスを得ることになる。

ハロウィンの催しは、公共の場所だけでなく、私的なレベルにも延びている。プライベートな形態では、子供たちが、家々を訪ねて、キャンデーをねだる。家のベルを鳴らしてドアが開けられると、子供たちは、アメリカのモデル通り“trick or treat”（もてなしておくれ、さもなきや、いたずらするぞ）の声を挙げる。あるいは、そのノルウェー語のヴァージョンとして、“knask eller godteri”, “knask eller knep”, “knask, knep eller rampestrek” といった言い方をする<sup>4</sup>。家々を廻るのは、5歳位の子供だけでなく、ティーンエイジャーも一緒である。家々の訪れに際しては特別のパフォーマンスは見られず、アメリカの流儀にしたがって、ひたすら菓子類をねだる<sup>5</sup>。仮装そのものは大層盛んで、ハロウィンの普及と共にビジネスとして利益が上がるものとなっていることは明らかである。魔女、魔法使い、吸血鬼、幽霊、〈大きな鎌を持つ男〉<sup>ii</sup>などのコスチュームはそれぞれ揃いのものが売られており、一般化している。コミックの連続物で恐怖の度合いが比較的小さなバットマン、ファントム、スーパーマン<sup>iii</sup>などのコスチュームも見受けられる。

歳の入った若者たちは、ハロウィンを自分たちの流儀で楽しんでいる。そうしたプライベートな催しはますます一般的になってきている。友人や知人たちを招いてさまざまな趣向をこらす、それはホラーや驚愕がテーマになる純然たる仮装パーティーから、さらに進んでコスチュームに加えてホラー・アクションをとりまぜたアイデアにまで及んでいる。その際、アメリカのホラー映画として知られる1978年の「ハロウィン」<sup>iv</sup>にヒントを得ている場合も少なくない。また手作りの「お化けの部屋」で恐怖をそそる様々なものを見せたり触らせたりして招待客の肝試しをすることもある。葡萄の皮をむいて飛び出した目玉を作り、ケチャップを水で薄めて身体に血が噴き出す様子を再現し、糸巻きから細い糸を輪のように繰り出して〈怪しげな〉蜘蛛の巣を作り上げる。野菜や果物の皮を剥いで心臓や腸や胃が飛び出た状態に見立てるが、もし暗い部屋に長く居たり目隠しをされておれ

4 これらのフレーズは直訳すると次のようになる。“knask eller godteri” (crunchy candy or goodies), “knask eller knep” (crunchy candy or tricks), “knask, knep eller rampestrek” (crunchy candy, tricks or vandalism).

5 Bannatyne 1990.

ば、自分が次に出遭う場面を想像することはとうていできないであろう。ハロウィンの催しでは、そうした独創性やイマジネーションが重視され、またそのためには予め時間をかけて準備をするのである。

## メディアのなかのハロウィン

ハロウィンの伝統がノルウェーに入ったことについては、人々の物の見方や姿勢から行動のパターンに至るまで、マスメディアがあたえた影響を切り離すことはできない。さらに、マスメディアがハロウィンに焦点を当てたこと自体が、高まる一方のグローバリゼーションの一部と見ることができる。実際、国や民族や多くの人々の相互の接触や認識に、グローバリゼーションは大きな影響をあたえている<sup>6</sup>。メディアがエンタテインメント産業に軸足を置く度合いが高まり、その結果、ノルウェーのマスメディアが、国際的なないしはアングロサクソン・アメリカのポピュラー・カルチャーの伝播者として大きな役割を果たしていることは、さまざまな角度から指摘することができる。要するに、映画、テレビ、インターネット、新聞を通じた広まりである。

ハロウィンの伝統がノルウェーで知られるようになったことには、全国的大新聞も規模の小さな地方紙も共に役割を果たしてきた。1997年以前は、ハロウィンが記事になることはほとんどなかったが、この数年は氾濫と言ってもよいほど盛況である<sup>7</sup>。新聞の記事は、また読者にその伝統の文化史をたずねる機会をもあたえることになる。ハロウィンの場合には、歴史的な流れとして、ケルトのサムヘイン祭 (Samhain) やサムヘインの民衆的形態、さらにキリスト教の万聖節 (All Saint's Day) を経て、今日アメリカ合衆国で見られるハロウィンという経路が提示された。その点では、ハロウィンについて新聞が取り上げた歴史解説が、この祭りの伝統の理解として機能している<sup>8</sup>。事実、ノルウェーのニュース・メディアが中心的に取り上げるのは、ほとんどの場合、北米のハロウィンの今日の形態である。またその点では、アメリカのパターンに沿ったハロウィンのあり方を紹

<sup>6</sup> Annttonen 1999, p.3-19.; Johnsen 1999, p.151-168.

<sup>7</sup> これについては、ノルウェーの3大新聞が好個の事例を提示している。„Bergens Tidende“, „Aftenposten“, „Dagbladet“ の3紙によるハロウィンの扱いを記事数で見ると、これら3紙の合計は、1 (1996), 2 (1997), 4 (1998), 10 (1999), 18 (2000) と推移した。これらの記事はそれぞれに違いがありはするが、内容と記事の回数の点では、年を追うごとに、より詳しく、また具体的になっていった。これは、町村紙、地方紙、全国紙のいずれにも共通した傾向である。これについては次の Website を参照, <http://webatekst. Aftenposten.no/>

<sup>8</sup> Bergman 1995.

## ヨーロッパ諸国のハロウィン (2)

介することに熱心でもある<sup>9</sup>。因みに、全国紙の「アフテンポステン」は、昨年、読者に向けて次のようなレポートを載せた。「興味のある方は、ハロウィンの歴史のページを開けてみてください。2000年前のケルトの源流がどんなものであったかが分かるでしょう。」<sup>10</sup>

この数年のあいだにハロウィンに関する英語の書物が書店にたくさん並ぶようになった。それらのなかには、さらに身近にするためにノルウェー語に翻訳されたものも見られる<sup>11</sup>。またビデオやテレビやインターネットによる情報も増えており、かくしてノルウェー人には、ハロウィンの伝統はより知られ、より親しまれるものとなってきた。その際、マスメディアは、ハロウィンの演出における中心的な役割を果たしてきた。ハロウィンに対するノルウェー人の見方の形成に、他の国々の祭りのあり方についての知識が潜在的に作用していることは疑えない。ノルウェーの子供たちがハロウィンを行なうにあたって、新聞が子供向けに具体的に進め方を説明してきた面もある。同時に、ハロウィンに商業が重要な役割を果たし、特にコスチュームやアクセサリーの販売を後押ししてきたこと、さらに催しの実際にはコマーシャルが一役かったこともあったことも、新聞は報じてきた。因みに、ハロウィンのメニューにはカボチャが欠かせないことも新聞は取り上げ、そのレシピの伝達者ともなってきた<sup>12</sup>。

ハロウィンをめぐる新聞記事も書物も、仮装行事ないしは秋期のフェスティバルとしてのハロウィンには肯定的な姿勢にある。しかし、ノルウェーの人々の見方がかなり割れていることは、昨年新聞に現れたところからだけでも判明する。読者蘭には、“trick or treat”を叫ぶ子供たちの行為に感心しないものがあつたことを訴えているものが見受けられる。警察も、仮装した子供たちによる迷惑行為の通報をノルウェーの数箇所ですべて受け付けた。子供たちが、その掛け声の“trick”（もてなせ！）に真剣になり、キャンデーを呉れなかった家には、郵便受けを壊したり、塵芥バケツをひっくり返したり、卵や腐った野菜その他のゴミを壁やドアに投げつけたりした事例もあつた。これに関連して、警察は声明を発表し、次のような見解を示した。＜彼らが新しい流行に夢中になり、トラブルを起こすことがあれば、それは彼らの過失である……＞<sup>13</sup>。ハロウィンが関係した乱暴に対して

<sup>9</sup> Aftenposten 01.XI.2000.; Bergens Tidende 02.XI.2000. したがって、新聞は、読者にハロウィンについて一層情報を得るよう勇気づけている。例えば“Adresseavisen”紙は、読者に執筆を促して、こう記す。＜ハロウィンのパーティーを成功させるために必要とするあらゆることがら、この本には載っている＞(Adresseavisen 27.X.2000).

<sup>10</sup> Aftenposten 02.XI.2000.

<sup>11</sup> 一例を挙げると、さしずめ“Halloween: Magical tidbits, food, costumes and decoration”であるが、同書はサブタイトルに「ハロウィン、そのAからZ」(Moen 2000)とあるように手引き書である。

<sup>12</sup> Dagsavisen 01.XI.1997, Tonsberg Blad 03.XI.2000.

<sup>13</sup> Aftenposten 03.XI.2000.

不満が表明されたのに続いて、キリスト教の立場からみたハロウィンへの懐疑も噴出した。〈目を覚ませ。子供たちへのいかなる影響も許してはならない。子供にパンの代わりに石をあたえるのは大間違いだ〉。これは、ハロウィンは子供を駄目にするという姿勢の端的な現れであると共に、子供は教え込まなければいけないというキリスト教的な価値観に立った距離の取り方でもある<sup>14</sup>。かくしてハロウィンは、かなり感情的なりアクションを惹き起こした。とりわけ、ハロウィンに対して否定的な見解を表明したのは、育児・家族省の大臣カリタ・ベッケメロム・オルハイムで、昨年、論議のなかで、こう述べた。〈このケルトの風習、と言うよりアメリカの馬鹿騒ぎだが、これをノルウェーに持ち込むことに対して批判がいたって小さいことに、むしろ驚いている。私ですら、外国のショッピング・フェスティバルを持ち込むことにも、子供たちにグロテスクな恐ろしい小道具をあたえることにも反撥を感じる。…… こういう悪魔的で、悪ふざけのパーティーが本当にノルウェーに必要であろうか。〉<sup>15</sup>

この育児・家族相の見解は、ハロウィンをコマーシャルリズム的なマス・カルチャーの一部と見るもので、言い換えれば、歴史と連続性と正当性に根をもつものとしての伝統への対立物とみなしている。また、かかる批判に容易にさらされるのは、ハロウィンがノルウェーでは新しい現象だからでもある。ノルウェーには、扮装と仮面の長い伝統がある。そこでは悪ふざけもあれば、戦慄的なものや恐怖をそそるようなものもあって、伝統的な形式・内容の一部となってきた。その一例はクリスマスの扮装の伝統で、そこでは、おふざけ、いたずら、それに超自然的なものの出現が核となってきた。その伝統とハロウィンの違いは、前者がしきたりにも儀式にもなっており、そこではいたずらや狼藉がカオスの正統的な表現となってきたことにある。ノルウェーのフォークロリスト、アンネ・エリクソンは、伝統 (tradition) という言葉は質のあり方を通常指していると述べている<sup>16</sup>。伝統的な材料は、安全、アイデンティティ、形態の恒常性、文化的な帰属性を意味するのである。そうした観点からの伝統への関心は、屢、伝統作りへ進んでゆく。すなわち、新しい伝統を創出し、他者に活力をあたえ、あるいは勇気づけるのである。ハロウィンにも、新しい文化的環境のなかでその形態や内容や機能をはっきりさせる試みがなされることがあるが、そうした場合には、ハロウィンは、伝統作りの過程と呼ぶことができるものの一部となっているのであろうか。

---

<sup>14</sup> Sunnmorsposten (Sunnmoreで発行されている地方紙), November 2000.

<sup>15</sup> Aftenposten 02.XI.2000.

<sup>16</sup> Erikson 1999, p.179.

## 伝統をたずね、意味をもとめて

風習が文化と社会的環境のなかに根を下ろすためには、また風習が次の世代に安定して送り伝えられるためには、文化的諸要素と言ってもよいものが内実と重みを提示し、これが参加者にとって意味あるものとなる。一般的な歴史に錨を下ろすことは、屢、非常に重要である。歴史は、一般的な基盤を作り出すことに寄与することができると共に、風習に、護り伝えるに足る文化的記念碑のような価値を与えることにも寄与することができる<sup>17</sup>。歴史的な次元だけでなく、それに加えて、真正で正統的なものが、目下の文脈では、屢、重要なファクターである。同時にそれは、伝統の維持に寄与するファクターであり、また意味をになう要素として機能するファクターである<sup>18</sup>。しかし、ハロウィンは、ノルウェーでは歴史への投錨を欠いている。ハロウィンの歴史的背景に言及する多くの新聞記事、学校やクラブにおける歴史への注視が考慮しなければならないのは、厳密に言えばこの点での光の当て方である。それらは、歴史の真空を埋めてはいない。しかしまた記事類は、他に代替するものが無いとすれば、伝統への歴史知識と内容を提供することになる。同時に、記事が描き出し、マスメディアが一般的に言及するのは、文化的・社会的コミュニティへの枠組みの提示であるが、その枠組みたるや、市町村的なもの、地方的なもの、あるいは国民的な枠組みだけではすまず、同時にグローバルでもある。

フィールドワークから得た材料であるが、二十歳台半ばの一人の女性が、友人たちと共にハロウィンの催しを行なうことにした、と話してくれた。理由は、<常とは異なる>経験を求めたからで、おふぎけの場を設けて楽しい思い出を得たいからであった。たしかにハロウィンは、彼女の周囲でも、出発点においては外国のものであり、伝統と言っても、アメリカの映画やテレビから知識が主要であるに過ぎなかった。そこで、彼女らは、さらに多くの知識を得たいと考えた。そして、書店やインターネットや新聞を通じて情報を収集した結果、相当の歴史知識を獲得し、ハロウィンについての理解も深まった。以上の経緯は、子供や若者やヤング・アダルトがハロウィンについて実際に情報をあつめるようになる多数の事例の一つである。ノルウェーの人々が何故ハロウィンの祭りをするようになるかについては、幾つもの理由があろう。しかし一般的には、おふぎけのパーティーが特殊な場面を作るからであり、またパーティーでは子供たちが思い切った衣裳をつけるからであり、またパーティーでは皆と一緒に何かをすることになるからである。歴史知識をもとめるのは、ハロウィンにノルウェーの脈絡に即した内容を付与する道を探し出すためと

<sup>17</sup> Erikson, 1999.

<sup>18</sup> Ohrvik 2000, p.82.

見ることができよう。催しが多元的であることも、(アメリカの見本からの影響や刺激が大きいとしても) 同じ光に照らし出すことができよう。ノルウェーにおいてハロウィンの催し方が多様であること、形式・内容・機能が明確な枠組みをもっていず、それでいて意味づけをしようとする事、これらは実験の表れでもある。

## ノルウェーのハロウィン — トレンドかトラディションか？

ハロウィンがノルウェーでその程度定着するかについて、はっきりした予想を立てるのは難しい。これまでも、外国の伝統がノルウェーでたちまち広がり力強く盛り上がり、その後急に姿を消した幾つかの例がある。1980年代には、カーニバルがノルウェーへ伝わり、大きな都市では大規模なパレードが挙行された。しかし数年続いた後に萎んでいった。それゆえ、トレンド(流行)とすることができる。80年代のカーニバルは、外来の枠組みと集団行事が、より深い理念や価値が凝縮した内容以上に意味をになうエレメントして大きな役割をもった社会的イヴェント言うことができる。今日、ハロウィンがノルウェーで見られるが、変装と集団行事が中心という点では、外来の枠組みが強調されることが特徴でもある。ハロウィンの催し方は、恒常的な形態を創出するためにパターンを要求すると言うより、形態をめぐる実験の方に主眼があるものと見ることが出来る。ハロウィンがどの程度トレンド(流行)の特徴を持ちつづけるか、それともノルウェーのトラディション(伝統)の複合のなかに場所を占めることになるのかは、なお観察を要しよう。どちらに向うにせよ、その催しが、参加者に対してどのようにして意味をあたえるのか、決定因子の一つになるであろう。

### [参考文献]

- Anttonen, Pertti J. (1999), *What is Globalization?* In: Kultur – Kreativitet – Globalisering. [Culture – Creativity – Globalisation] *Norver nr.1. Journal of Norwegian Folklore Studies*. Novus. p.3–19.
- Bannatyne, Lesley Pratt (1990), *Halloween. An American Holiday, An American History. Facts On File. New York.*
- Bergman, Anne (1995), *Finns det myter i dagstidningar?* [Are there Myths in Daily Newspapers?] In: Selberg, Torunn (ed.), *Nostalgi og Sensasjoner. Folkloristiske perspektiv på mediekulture.* [Nostalgia and Sensations: Folkloric Perspectives on the Culture of Media.] NIF 1995. Åbo., p.69–94.
- Erikson, Anne (1999), *Dialog og egenart.* [Dialog and Distinction.] In: Knut Aukrust / Anne Erikson



## ヨーロッパ諸国のハロウィン (2)

- (ed.), Kunnskap om kultur. Folkloristiske dialoger. [Knowledge about Culture: Folkloric Dialogs] Novus Forlag, Oslo, p.169–183.
- Johnsen, Birgit Hertzberg (1999a), *Folkekultur og globalisering: Humor I dagens samfunn*. [Folk Culture and Globalisation: Humor in Today's Society.] In: Knut Aukrust / Anne Erikson (ed.), Kunnskap om kultur. Folkloristiske dialoger. [Knowledge about Culture: Folkloric Dialogs] Novus Forlag, Oslo, p.151–169.
- Lilja, Agneta (1998), *Sockrade hjärtan och godissugna spoken. Alla Järtans Das och Hallween – två nya festseder i Sverige*. SOFI, språk – och folkminnesinstitutet. [Sugared Hearts and Sweettooths Ghosts. Valentins Day and Halloween. Two New Celebratory Customs in Sweden. Language and Institute for Popular Memory]. Upsala.
- Ohrvik, Ane (2000), *Må stjerna komme inn? En studie av tradisjonsoverføring knyttet til stjernegutt-tradisjonen i Gfrimstad*. Hovedfragsoppgave i folkloristikk. Institutt for kulturstudier, Universitetet i Oslo [May the Star Come In? A study of the Transmission of the Star-Boys Tradition in Grimstad (Norway). Master Thesis in Folklore, Department of Cultural Studies, University of Oslo].

### [訳注]

- i (p.186) <クリーピーとクローリーたち> (creepy-crawlies) : カナダの生物学者・環境運動家で日系三世のデイヴィッド・スズキ (David Suzuki) が1960年からテレビなどで担当してきた人気番組“Nature of the Things” から生まれた映画のキャラクターである昆虫を指す。英語の形容詞“creepy” (むずむずする) と“crawlly” (這い回る) を組み合わせている。1996年にVideoが作成された。
- ii (p.187) <大きな鎌を持つ男> : 死神を表すヨーロッパの伝統的なイメージ。
- iii (p.187) バットマン, ファントム, スーパーマン : いずれもアメリカのコミックや映画。“**Batman**” : DCコミックス社の前身会社が刊行していた“DC Comic” 27号 (1939年) に初めて登場したボブ・ケイン (Bob Kane) とビル・フィンガー (Bill Finger) 原作のコミックのタイトルならびにメイン・キャラクター。父母を悪漢に殺された少年が心身を鍛え、昼は富豪にしてプレイボーイ、裏面で蝙蝠のコスチュームで悪人との闘いに臨み、また正義の仕事を優先させるため恋愛は破局に終るという設定のシリーズ。1989年と1992年にティム・バートン (Tim Burton) の監督、マイケル・キートン等の出演で映画化された他、テレビ映画や任天堂などのファミコン・ゲームとしても人気を博している。 ; “**Pahntoms**” : 1989年に製作されたホラー映画、原作ディーン・クーンツ (Dean R. Koontz), 監督ジョー・チャペル (Joe Chappelle), 出演ベン・アフレック, ピーター・オトゥール他、町の住人全員約400人が姿を消したり死体となっているという設定から始まる。 ; “**Superman**” : 共にクリーヴランドで活動していたジェリー・シーゲル (Jerry Siegel) が原作を、ジョー・シャスター (Joe Shuster) が作画を担当して製作し、1938年にシリーズ“Action Comics” No.1として刊行された。映画、テレビ、ゲームなどの媒体と結びついて世界中で人気を博したコミック・キャラクターという点でも、また時期が早かった点でも、アメリカ文化あるいはそのサブ・カルチャーを代表するものの一つと言える。
- iv (p.187) ホラー映画「ハロウィン」 (“Halloween”) : 1978年, ジョン・カーペンター (John

Howard Carpenter born in 1948 (ニューヨーク出身) が監督・脚本 (協力者と共)・音楽を担当した。今日まで8作が製作された“ハロウィン”シリーズの第一作。10月31日の当日あるいは前後に白いハロウィン・マスクをつけて凶行に及ぶ殺人鬼ブギーマン (Boogeyman) とそれに対抗する精神科医という基本構図を持つ。時期的にも早く、アメリカ映画におけるハロウィンと異常殺人やホラーの組み合わせをすることになっただけでなく、その後のホラー映画の方向付けに大きな影響をあたえた。